



エビデンスに基づいて保護者とともに行う発達障害児の早期療育モデル実装PJ

エビデンスに基づく 早期療育モデルの地域実装 —エンパワメントモデルとICTの活用—

特定非営利活動法人ADDS共同代表
慶應義塾大学社会学研究科訪問研究員
熊 仁美

自己紹介

熊 仁美（特定非営利活動法人ADDS共同代表）
博士（心理学）
慶應義塾大学社会学研究科訪問研究員
法政大学兼任講師

●発達心理学

人の生涯の発達を通じて、その心身のはたらきをどのように変化させていくか、その発達をどのように支援すればよいかなどを研究する学問です。

●応用行動分析学

人間の行動を科学的に研究し、人間理解・人間生活の様々な課題解決に取り組む学問です。人間の「行動」を「環境」との相互作用の視点から捉えます。

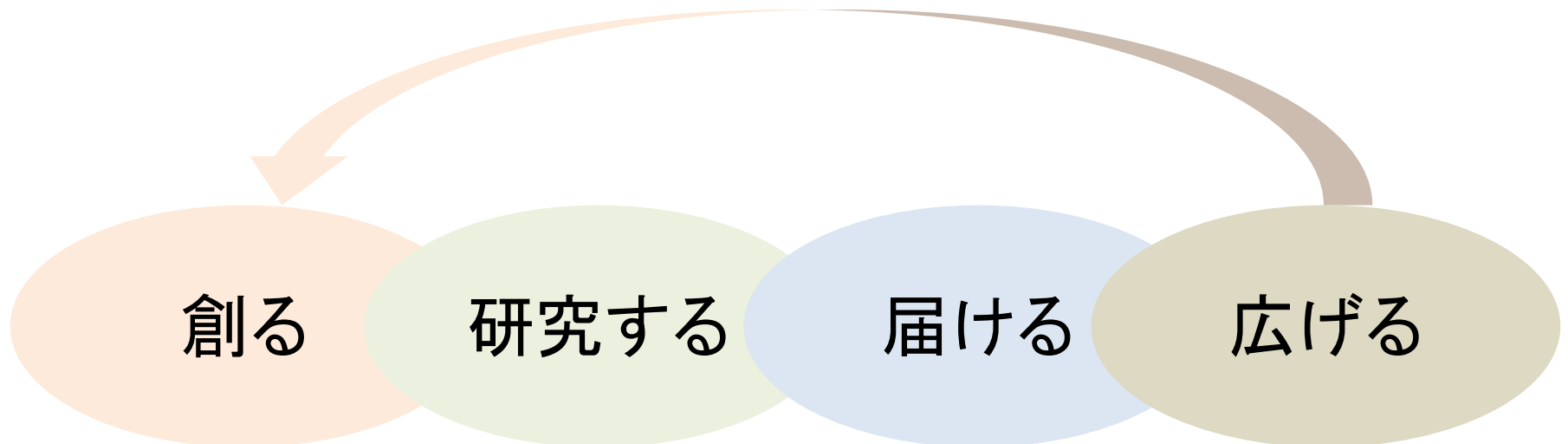


Advanced Developmental
Disorders Support



MISSION

全ての子どもが可能性を最大限に広げ
豊かな人生を歩める社会の実現



発達障害は社会全体の課題である



About 1 in 59 children

(CDC, 2018)

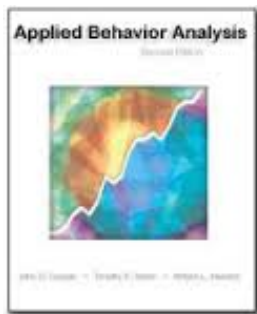
療育のエビデンスは既に出ている

- 国内外の研究により、自閉スペクトラムの子ども達の言語・認知・行動問題、社会性等の発達を促進する具体的な方法論は明らか
 - 早期
 - 行動・発達的な観点
 - ⇔従来の「心理」的なアプローチ
 - 個別療育
 - 家族支援（ペアレントトレーニング）

応用行動分析(ABA)に基づく 早期療育



- ・週35～40時間の早期集中療育により平均IQが20上昇、約50%の子どもが知的に定型発達域に到達した(Lovaas,1987; Sallows & Graupner, 2005)
- ・IQが35以上の24名の児童に対し、週に約30～40時間の療育を4年間実施。平均IQは約25上昇した。(Sallows & Graupner , 2005)
- ・生活年齢が18～30ヶ月の48名の参加児に対し、週20時間の介入を2年間実施。平均知能指数は約24上昇し、適応行動や、診断名の変化など、統制群と比較して有意に改善を示した。(Dawson et al., 2010)



Pearson(2007)
800 pages

アメリカでは約40州で自閉症児の療育として
保険適応されている

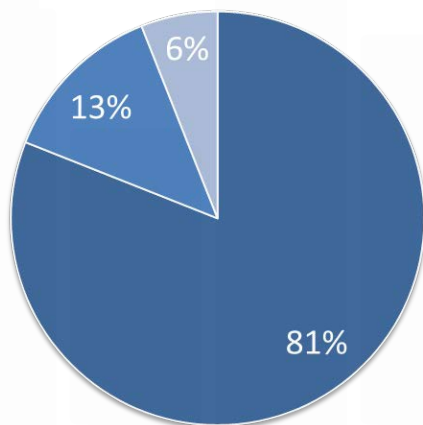
80%程度の自治体は早期発見に取り組んでいるが、早期支援は25%程度である。

日本臨床心理士会 乳幼児健診における発達障害に関する
市町村調査 報告書より(平成26年3月31日)

- 1歳6ヶ月 (n=1006)

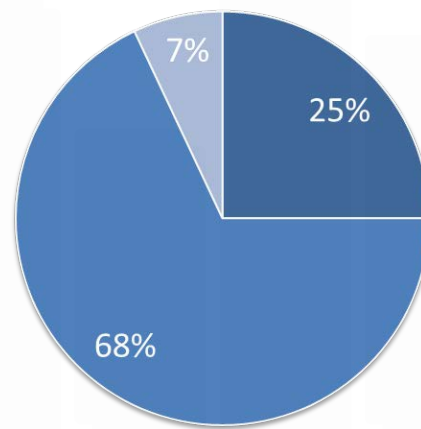
発達障害のスクリーニング

■ 実施 ■ 実施せず ■ その他



発達を促すプログラムの実施

■ 実施 ■ 実施せず ■ 無回答



公的な支援において 個別指導はほとんどなされていない。

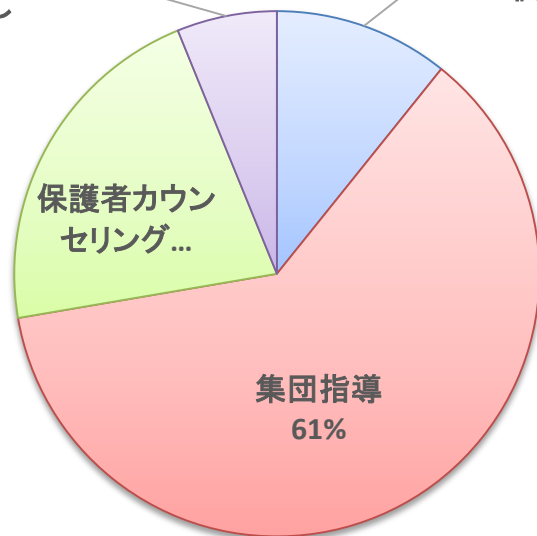
(70名の保護者アンケートによる実態調査)



Q. 療育センターでどのような情報やサービス
を提供されましたか？

特に情報やサー
ビスなし
6%

心理士等による
個別指導
11%



個別指導は重要にも関わらず地域の療育センターで思った以上に行われていません。

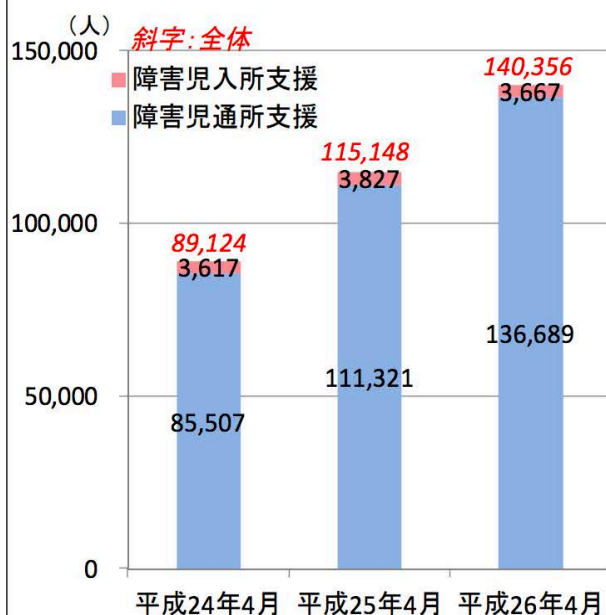
限られた人員では限られた利用者に提供できないという事情からです。



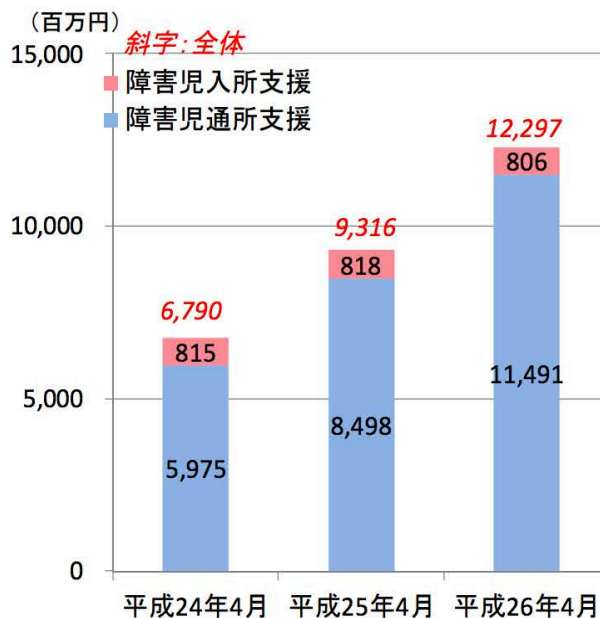
専門家依存の
モデルは限界

児童発達支援事業の通所施設は急増

利用児童数の推移



総費用額の推移



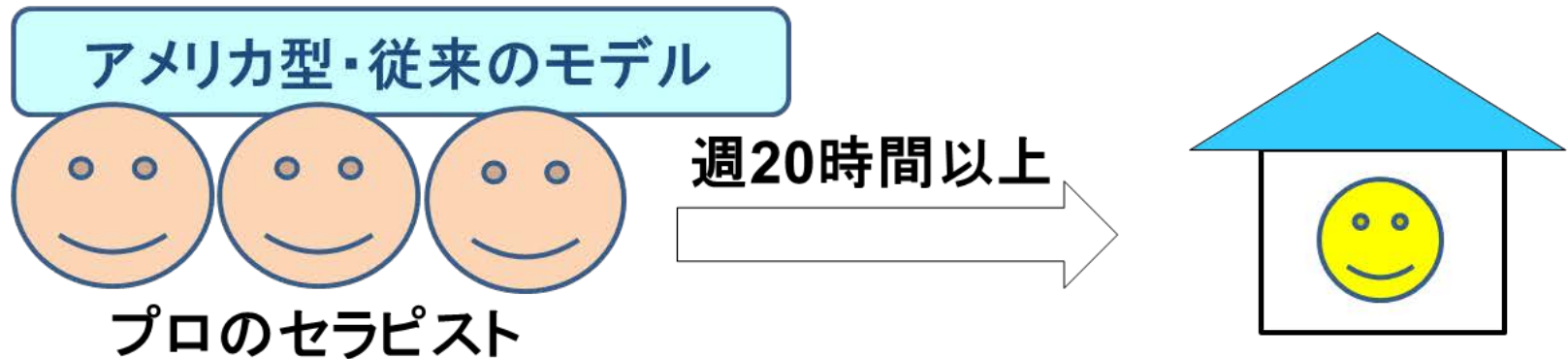
事業所数の推移



※出典: 国保連データ

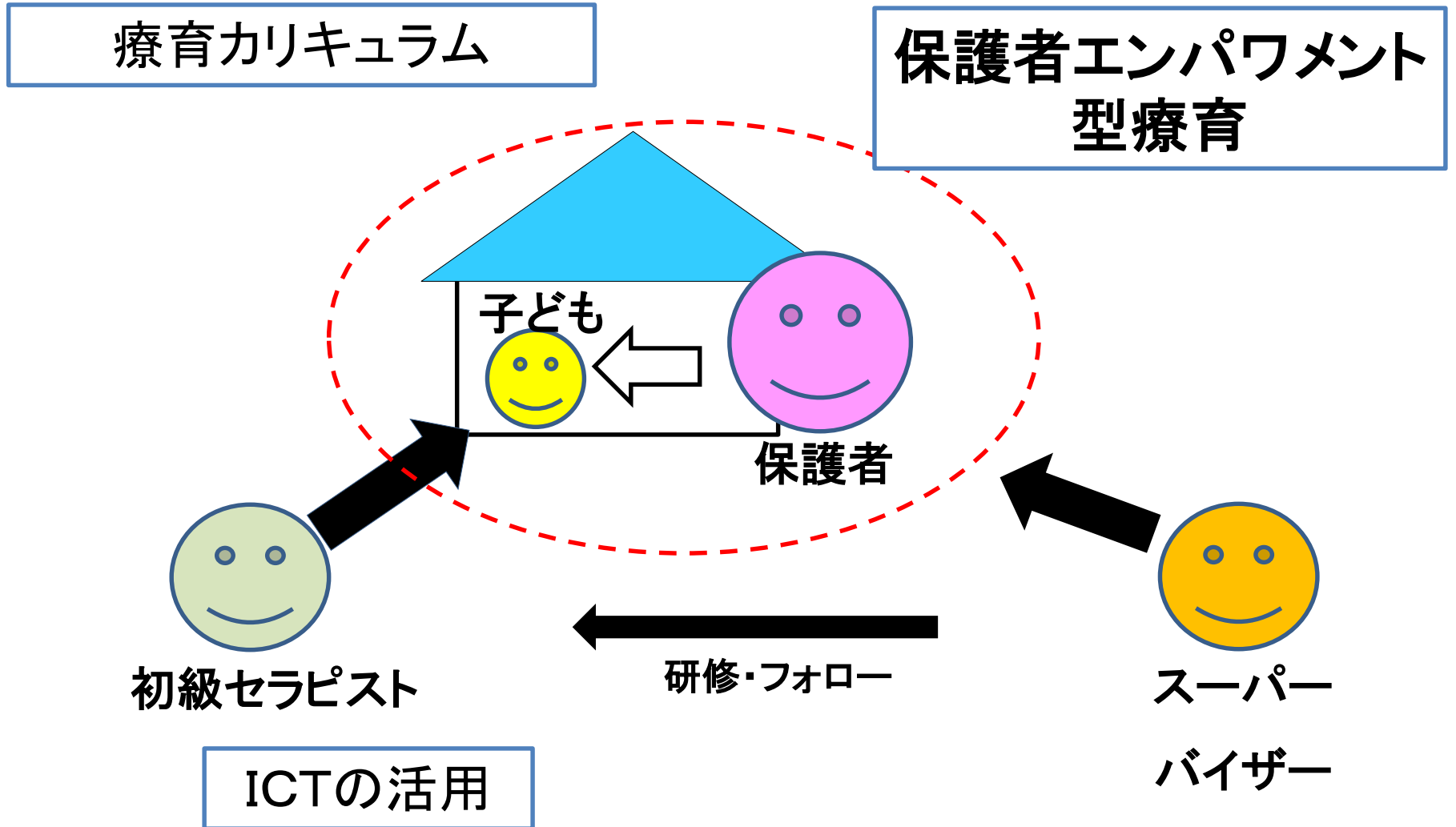
→ 支援の質の低下が問題

海外のエビデンスを実装するのは困難

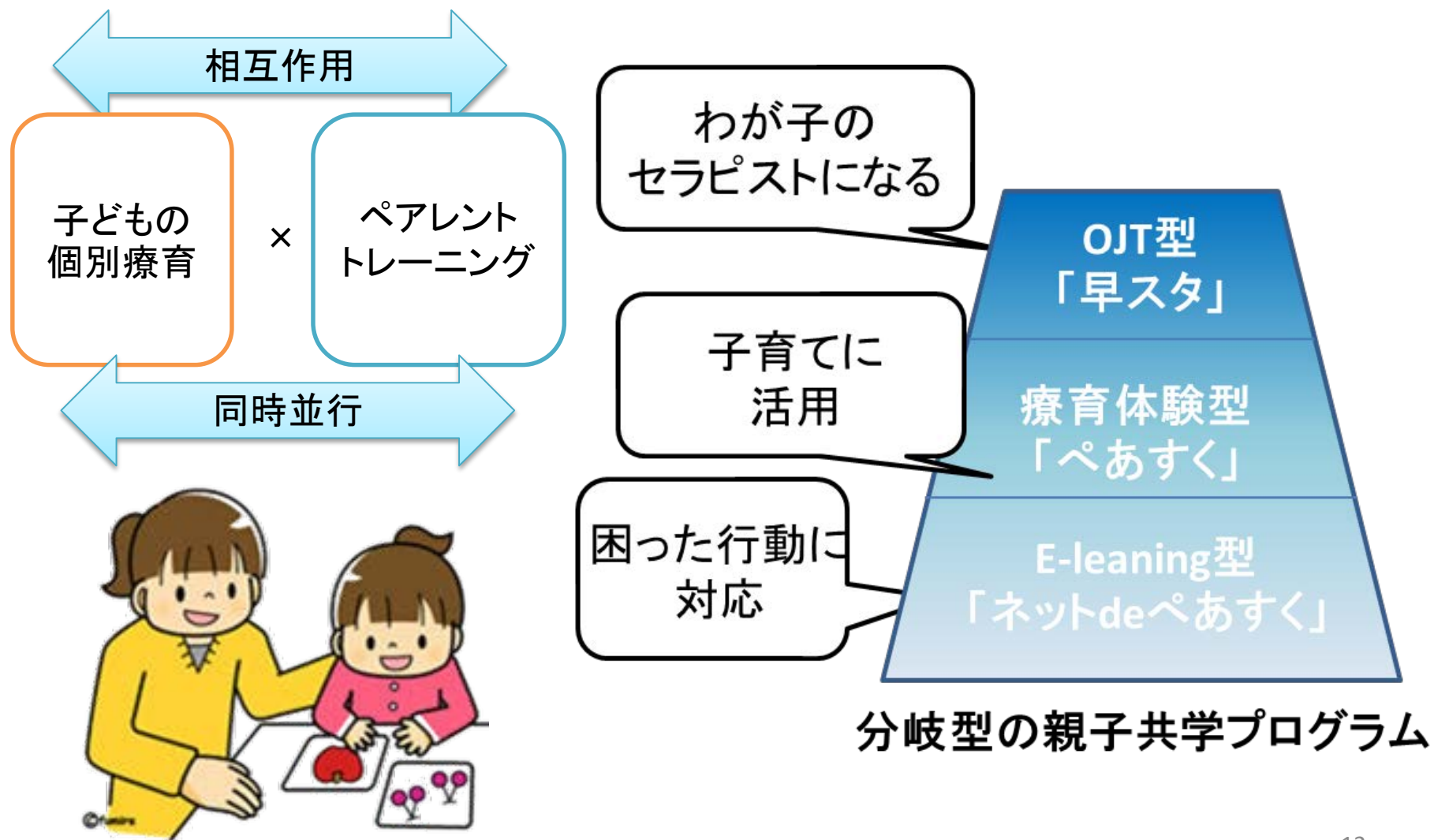


米国の成果を我が国で運用するのは、**人・経済・時間**コストが膨大(中野,2004)

日本の制度に合わせた療育モデルを



保護者エンパワメント型療育とは



「自閉症児の共同注意とコミュニケーション: 早期の評価と支援」 (熊, 2016)

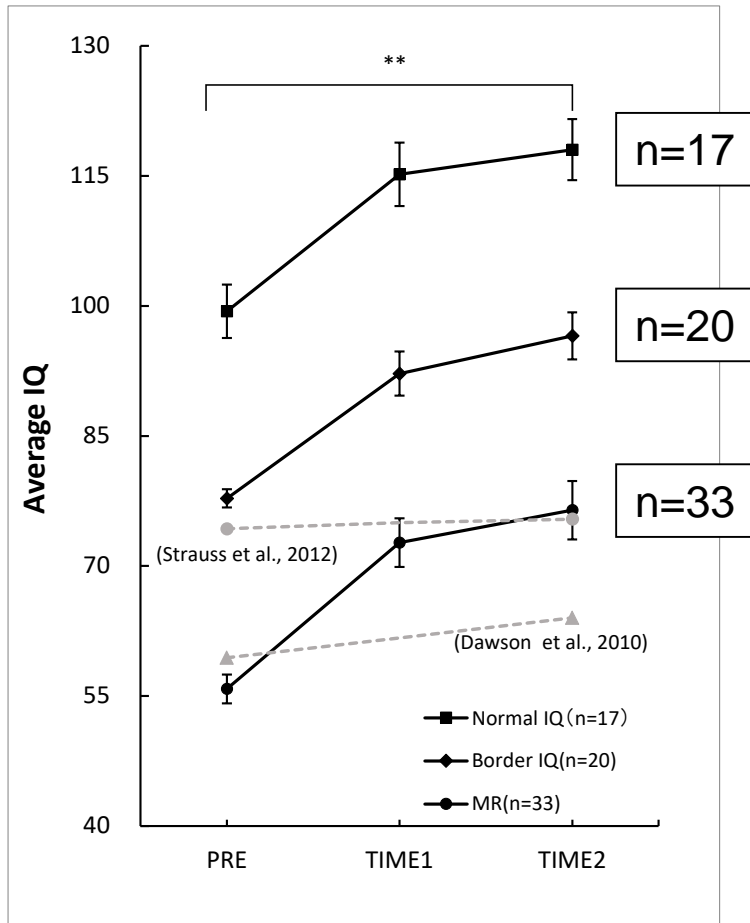


図3.

知的障害分類による群ごとの平均IQの変化。

** $ps < .01$ (*t*-tests with Holm's adjustment).

・ 通常群、境界群、障害群いずれも平均IQの有意な増加

・ 前半6ヶ月の成果が大

・ Strauss et al.(2012)と Dawson et al.(2010)の通常療育を受けた統制群は開始時IQが境界群、障害群とほぼ一致.いずれも有意な向上なし(点線).

全体: 19.61増加

前半: 16.90増加

後半: 3.71増加

熊・山本ほか
(in progress)

早期療育は重要である

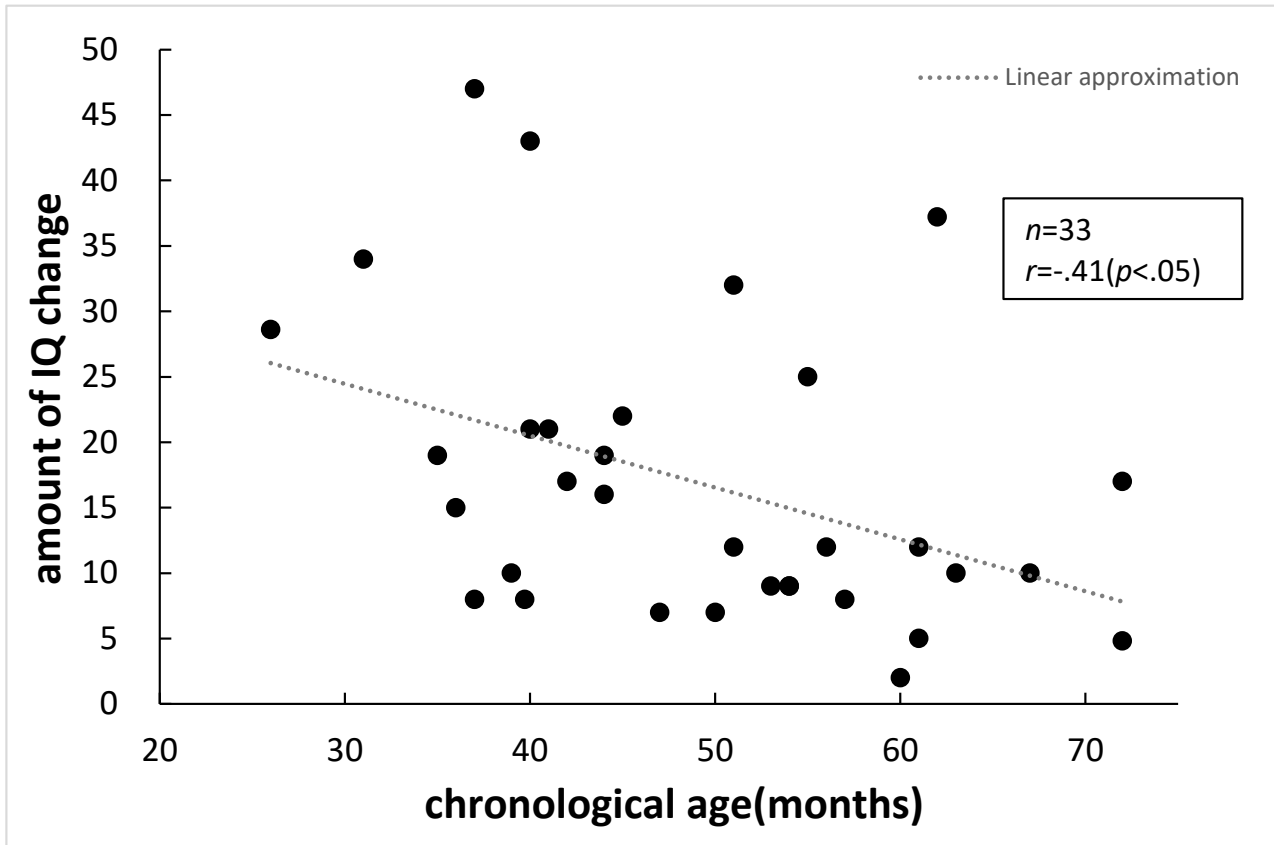


図7. 生活月齢とPRE評価-TIME1評価のIQ変化量の相関（障害群）。



エビデンスに基づいて 保護者とともに行う 発達障害児の早期療育モデル 実装プロジェクト

実装責任者：NPO法人ADDS共同代表 熊仁美



児童発達支援マルシェ



全国の10の機関と連携し実装を進めています

児童発達支援
マルシェ



一般社団法人
キッズライン



ADDS
Advanced Developmental
Disorders Support



横浜市南部地域
療育センター

ADDS × **MIRAIE**

由比ガ浜こどもセンター内
ADDS Kids 1st 鎌倉/
ミライエ鎌倉共同企業体

北海道

青森

秋田

岩手

山形

宮城

福島

栃木

群馬

茨城

千葉

石川

新潟

富山

長野

岐阜

愛知

静岡

神奈川

奈良

三重

和歌山

島根

山口

広島

岡山

兵庫

京都

大阪

奈良

和歌山

三重

和歌山

佐賀

福岡

大分

熊本

鹿児島

宮崎

鹿児島

鹿児島

鹿児島

鹿児島

NPO法人子育て
ネットくすくす



慶應義塾
Keio University
発達心理学
研究室



ままとこテラス
mamatoco terrace



ぶりんぐあっぷちば
子ども発達センター



児童発達支援センター
ゆーかりの森



MIRAIE
放課後等
デイサービス
ミライエ

放課後等
デイサービス
ミライエ

にじいろデイズ
NIJIRO DAYS

児童発達支援
にじいろデイズ
市川新田

多職種連携

行動リハビリテーション研究会 (OT・ST・PT)
双葉保育園 (保育士)

AI-PACとは



(ABA integrated Programs for Autism speCtrum disorders)

ADDSと慶應義塾大学が共同開発した発達障害児に対するエビデンスに基づいた包括的早期療育プログラム

行動的・発達的な観点による5領域600個を超えるカリキュラムリスト

学習基盤

働きかけ応答
注意の持続
強化子
自己統制
模倣

コミュニケーション

非言語
要求
受容
叙述
会話

アカデミック

数
文字
文法

視覚・運動

視覚情報処理
運動

社会スキル

社会性
生活スキル
スクールスキル

最新の知見
に基づき進化する
流動的なプログラム

国内外の7つの介入プログラムを包括して再構成した

- ・A Work In Progress (Leaf, McEachin, & Harsh, 1999)
- ・STAR Program (Arick, Loos, Falco, & Krug, 2004),
- ・Teaching Developmentally Disabled Children-The Me Book- (Lovaas et al., 1981)
- ・Pivotal Response Treatments for Autism Communication, Social, & Academic development (Koegel & Koegel, 2006)
- ・Teaching Language to Children with Autism or Other Developmental Disabilities (Sundberg & Partington, 1998),
- ・Picture Exchange Communication System (PECS; Bondy & Frost, 2002)
- ・認知発達治療の実践マニュアル-自閉症のStage別発達課題- (太田・永井, 1992)

基本俯瞰図

選択モード...

ターゲット

マスター

オプション課題

スクールスキル

生活スキル

様々な運動

発達の包括的な俯瞰図

学習基礎	自己統制	強化子の交換	強化子の回収	1試行1強化	ランダム強化	トークン (DTR)	カウントダウン	タイマー	おしまいの理解	まだだよなんて	順番言葉	写真スケジュール	文字スケジュール	トークン (日常)	自立学習	カレンダー理解	
学習基礎	模倣・動作	手へのリーチング	手へのリーチング (色々な位置)	粗大模倣 (上半身)	粗大模倣 (身体部位)	操作模倣 (1選択)	操作模倣 (2選択)	微細模倣 (顔周り)	微細模倣 (手指)	立った状態の動き	模倣の維持	様々な全身運動	左右の分化	左右非対称	ゆっくりした動作	遅延動作	
学習基礎	模倣・音声	道具を介した口辺模倣	口辺模倣	単音模倣	単語模倣	連続した数や単語	句や文の模倣	リズム模倣 (音声)	プロソディ (大小)	プロソディ (高低)	プロソディ (抑揚や速度)						
学習基礎	注意・流暢性	追視 (物)	追視 (隠れた物)	追視 (指で追う)	手作業フラッシュ	エコフラッシュ	模倣フラッシュ	マッチングフラッシュ	動作指示フラッシュ	受容フラッシュ	命名フラッシュ	ランダム指示フラッシュ	瞬間提示				
学習基礎	遊び	感覚 (味わう)	感覚 (触る)	感覚 (聞く)	感覚 (見る)	身体遊び	玩具の操作	タブレット遊び	手遊び歌	ボール転がし	絵本読み聞かせ	やり返し	追いかけてこ	おままごと	おかいものごっこ	お医者さんごっこ	戦い
コミュニケーション	社会性	課題実施前の目合わせ	応答型共同注意 (指さし)	応答型共同注意 (首)	応答型共同注意 (視線)	観察反応 (声)	観察反応 (様々な呼びかけ)	社会的参照	始発型共同注意 (経験共有)	協調的動作	社会的強化への注目	内発的強化	ペアリング	並行遊び	交換に応じる	順番交代	遊び「へん
コミュニケーション	要求	リーチング (物)	援助要求 (クレーン)	援助要求 (手渡し)	要求のアイコンタクト	見えるものを要求 (サイン/PECS)	見えるものを要求 (音声)	どっち?で選択 (指さし)	遠くのもの指さす	名詞の分化	2語文要求 (Oちょうだい)	見えないものを要求	動詞の分化	拒否	どっち?で選択 (音声のみ)	複数の物を要求	注目ねえ
コミュニケーション	受容・語彙	日常文脈での指示	ジェスチャー+物で反応	ジェスチャー無しで物に反応	名詞 (初級)	名詞 (離れたところ)	名詞 (探す)	キャラクター	人物	場所							



療育用の教材



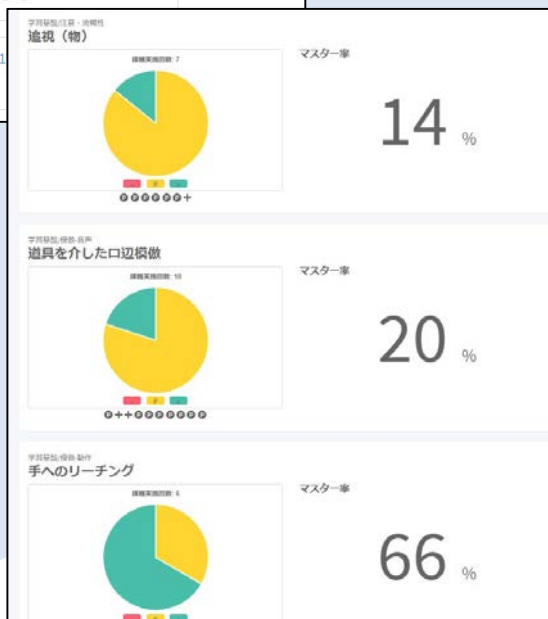
【受容-概念・指示】2段階動作

療育のモデル動画

単一事例におけるエビデンスの活用



- ・データにもとづいた支援方針の決定
- ・記録に基づく家庭と支援者・機関の連携



セラピスト養成と資格認定システムの 試験運用

- ・連携機関における地域研修会
- ・横浜、千葉は市の後援、香川は地域の大学と連携
- ・資格更新との連動を想定

100名



ぺあすくが届いた数

- 28年4月～9月 約25家庭(5～9)
- 29年10月～3月 約50家庭(6～19)
- 30年4月～9月 約60家庭(6～19)
- 30年10月～3月 進行中

- ・月に2回のスーパーバイズを実施
- ・遠隔の場合はビデオチャットを活用

約100名



親子の変化 (in progress)

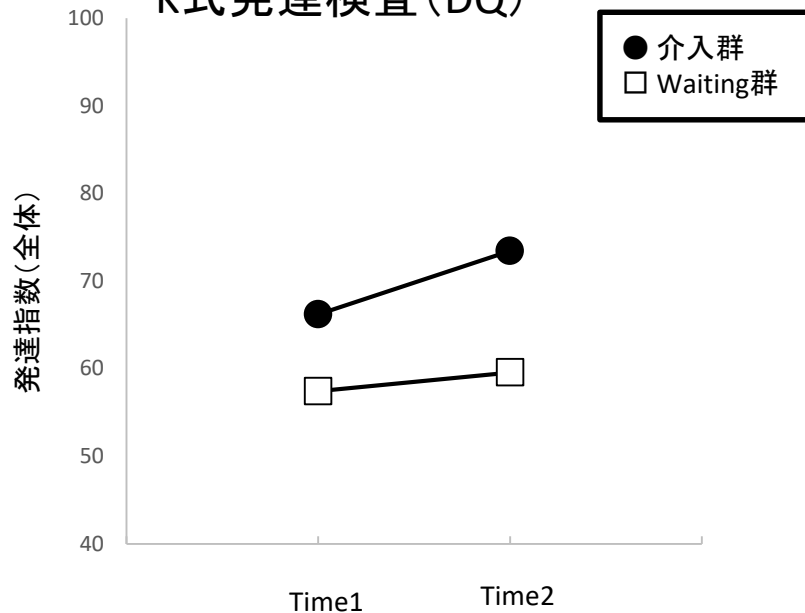
介入群 N=20

(月齢平均52か月、39~74か月)

Waiting群 N=7

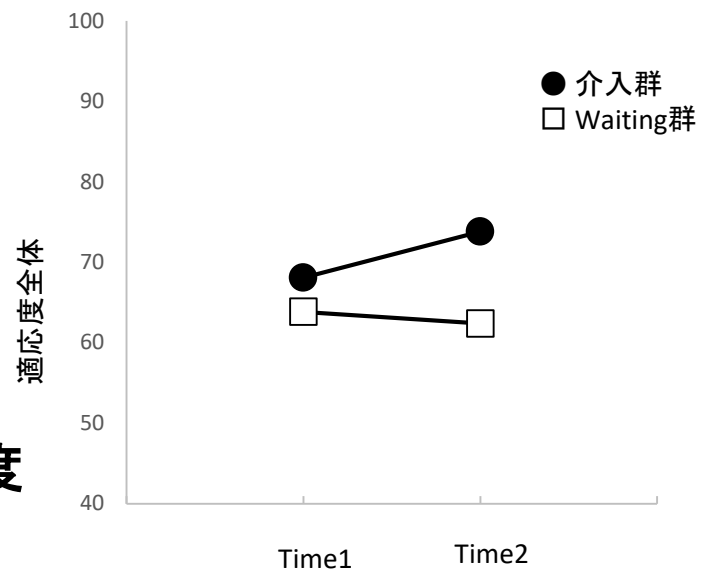
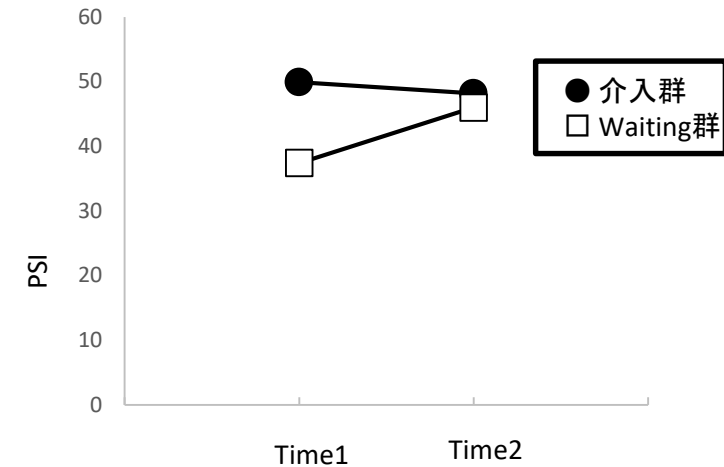
(月齢平均51か月、38~68か月)

K式発達検査 (DQ)



Vineland-II 適応行動尺度

PSI 育児ストレスインデックス



行政・民間との連携

就学前後の情報共有への活用事例

- 鎌倉市障害児通所支援施設の借受け事業者として、当法人と業務提携する株式会社セントスタッフ(放課後デイサービスミライエ)の共同事業体を選定
- 同施設内の放課後デイミライエにおいて、AI-PACを活用しライフステージをまたいだ連携支援へ



RISTEX 国立研究開発法人科学技術振興機構「研究開発成果実用化プログラム」とよむ連携により、産学連携を推進してまいります。
 エビデンスに基づく早期療育モデルが描く未来 Vol. 2
 親子の幸せを科学する地域療育の挑戦

参加費 無料

2018年 12月2日(日) 9:45-17:45

慶應義塾大学西校舎519号
 〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

第1部 基調講演・地域実践報告

9:45-10:30 基調講演「親任者による療育報告」
 「家での子育てにエビデンスに基づいた実践を
 親子の幸せを科学する地域療育の挑戦」
 藤 仁 慶
 NACIE-CAI協会の代表、慶應義塾大学特別研究員

10:30-11:00 基調講演
 「発達障害のある子どもがエビデンスに基づいた療育を受ける」
 坂本 美穂 先生
 慶應義塾大学特別研究員

11:30-12:00 地域実践報告
 山本 智恵 先生 (「豊洲地区発達障害者支援センター」の代表) 長瀬 真一 先生 (「東京都立大津田七丁目センター」の代表)

第2部 専門家による臨床ワークショップと事例発表

12:00-12:30 事例発表
 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表) 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表)

12:30-13:00 事例発表
 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表) 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表)

13:00-13:30 事例発表
 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表) 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表)

13:30-14:00 事例発表
 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表) 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表)

14:00-14:30 事例発表
 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表) 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表)

14:30-15:00 事例発表
 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表) 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表)

15:00-15:30 事例発表
 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表) 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表)

15:30-16:00 事例発表
 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表) 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表)

16:00-16:30 事例発表
 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表) 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表)

16:30-17:00 事例発表
 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表) 藤田 真由美 先生 (「発達障害者支援センター」の代表)

主催: 特定非営利活動法人ADDS
 共催: 慶應義塾大学発達と個性のグローバル研究センター(申請中)
 後援: 厚生労働省(申請中)

ADDIS 慶應義塾 Keio University 厚生労働省

今後の展望

- ・行政モデルの構築
- ・ICTを活用した機関支援と普及
- ・学びと発達のビッグデータ

